

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>(1) 現行授業の目標と教育効果</p> <p>科学的知識に基づいた基礎的な栽培技術を身に付けるとともに、急速に発展する施設園芸に対応できる科学的思考力と問題解決能力を養い、将来の農業を担う人材としての能力と資質を育成することを目標としている。</p> <p>授業では単なる知識の伝達にとどまらないよう、植物生理や土壌などの基礎的内容から始め、各分野の専門的技術の理解を段階的に深めたうえで、実際の営利栽培への応用につなげられるよう構成した。講義と実習を有機的に連携させ、知識の偏りを防ぎながら、自らの力で栽培を行う技能を養うことを重視した。</p> <p>(2) 自己評価</p> <p>技術面での習得については、概ね目標を達成できたと考えている。一方で、学生の思考力の育成にはなお課題が残ると感じている。授業中には、既存の知識を総合的に関連づけ、自ら考えて結論を導く課題を設定したが、学生が主体的に発想し、試行錯誤を重ねて問題解決に取り組む場面は限られていた。</p> <p>今後は、実際の営農現場で直面するような課題をより具体的に提示し、グループワークやディスカッションを通じて学生同士の意見交換を促すことで、主体的思考力の一層の向上を図りたい。また、成果の発表や振り返りの機会を拡充し、自らの考えを整理し表現する力の育成にも努めたい。</p>
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>(1) 現状の授業</p> <p>講義は教科書を基礎資料とし、パワーポイントを用いて進行した。教科書で十分に扱われていない分野や最新の技術動向については、北海道における営利栽培の実情を参照しながら補足を行った。</p> <p>実習では、初回に実習の目的や内容、注意事項を配布資料によって明示し、実施の意図を理解させたうえで進めた。また、理解の定着を図るためにレポートを多く課し、記述を通じた振り返りと考察の機会を設けた。授業中には、学生が主体的に発言・参加できるよう促し、ブラックボードシステムを活用して小テストを実施し、学修内容の復習と自己評価の機会を提供した。</p> <p>学生からは、パワーポイントの図表や画像を多用した点が理解を助けたとして概ね好評であった。一方、授業内容が多岐にわたり重要点への十分な説明時間が確保できておらず、また学生の発言が少ない点も課題として認識している。</p> <p>(2) 改善の取り組み（予定）</p> <p>今後は学生の理解度や反応を適宜確認し、授業内容を柔軟に調整する。特に内容をスリム化するため、重要性の低い項目を削減し、核心的なポイントに時間を確保して詳細に解説する。また、学生の積極参加を促すため、発表や意見交換の機会を増やす。さらに、専門性の高い内容については資料やスライドを平易化し、授業効果を高める。加えて、学生との対話を通じて実践的な学びにつなげる指導法の充実にも努める。</p>
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>講義では、パワーポイント資料を印刷配布し、追加内容はブラックボードに掲載して復習を可能とした。実習では必要に応じて手順書を作成・配布し、可能な限り現物を用いて実感的な理解を促した。</p> <p>特に土壌・作物分析実習では、分析項目ごとのマニュアルを新たに作成し、実験手順や結果活用方法を明確化した。また、各養分欠乏のキュウリ試料を作成し、分析データから科学的欠乏要因を考察する授業を導入し、理論と実践の連携を図った。</p>
<p>5 学生の指導（課外活動・厚生補導等）</p> <p>(主要10件以内)</p>	<p>2025年度～</p> <p>学生自治会</p>
<p>6 その他</p> <p>(主要5件以内)</p>	
<p>研 究 業 績</p>	
<p>1 研究分野・活動</p> <p>(記述式：350字以内)</p>	<p>研究分野「花き類の栽培技術および省力化技術開発と新規品目の地域適応性」</p> <p>前職では北海道の農業改良普及指導員として、主に花きの技術指導や産地形成に携わってきた。北海道の花き産地は冷涼な気候を活かした夏秋期出荷型として発展してきたが、農業構造の変化や生産者の高齢化・労働力不足により栽培面積が減少している。近年は温暖化の影響で、高温による品質・収量の低下も新たな課題となっている。今後は、これらの変化に対応するため、先進的技術を導入した省力化栽培や、実需者のニーズを踏まえた新規品目・品種の地域適応性を検討する。特に、簡易施設での実践的な高温対策技術の確立を目指し、持続可能な花き生産体系の構築に向けて研究を進める。</p>

2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)	今後の研究課題として、花き類を中心に次のテーマに取り組む。①施設栽培における環境制御技術の活用 ②環境負荷の軽減を目的とした持続的な栽培方法の検討 ③労働力不足に対応する省力栽培技術の開発 ④簡易施設に適した高温対策技術の確立 ⑤機能性資材の実用性評価。 さらに、道内ではまだ事例の少ない新規品目を対象に、寒冷地条件下での地域適応性や効果的な栽培方法についても検討を進める。これらの研究を通じて、北海道の気象条件に適した効率的かつ持続可能な花き栽培体系の構築を目指す。				
3 研究助成等 (主要5件程度)	(1) 文部科学省科学研究費 (2) 学内 (3) 学外				
4 資格・特許等 (主要3件以内)	農業改良普及指導員				
著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約	
北空知のスターチス類生産における花粉症対策の一考察	共著	2010年12月	北園談会報 44号	シネンシス系スターチスの花粉発生量は多く、生産者の花粉症状の要因である	
鈴バラ栽培における生産阻害要因(虫害)について	共著	2010年12月	北園談会報 44号	すずばら(ロサ ルブリフォリア)の先枯れはオオバラクキバチの害である	
スターチス・シヌアータの茎葉黄化に対する採花後遭遇積算温度の影響	共著	2012年12月	北園談会報 46号	市場で発生する茎葉黄化症状は、採花後の積算温度が影響し品種間に差がある	
スターチス・シヌアータの茎葉黄化抑制に対する品質保持剤の効果	共著	2013年12月	北園談会報 47号	市場で発生する茎葉黄化症状には、水揚げ時にジベレリンの処理が有効である	
2016 作物展望 需要期見据えた栽培管理の強化を	単著	2016年1月	ニューカントリー	季節変動が大きく花きの需要には、開花調整技術や作型の組み合わせが重要	
2017 作物展望 適正な温湿度管理で品質の安定を目指す	単著	2017年1月	ニューカントリー	気象の影響を少しでも小さくするためには、様々な資材や機材を有効に活用する	
2018 作物展望 需要の変化に対応した品目選びが大事になる	単著	2018年1月	ニューカントリー	輸入切り花の増加や需要の変化をとらえ、商品力の高い品目選びが大切	
かぼちゃ貯蔵腐敗を減少させる風乾処理の検討	共著	2021年4月	北農第88巻2号	貯蔵腐敗には、風乾処理時のコンテナ内の通風ムラ改善と送風温度確保が重要	
研究業績(過去3カ年分)				国際的活動 の有無	社会的 活動の 有無
著作数	論文数	学会等 発表数	その他		
0	0	0	0		
学 内 運 営 業 績					
1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	2022～2023年度 教務委員会委員 2022～2023年度 FD委員会委員 2022～2023年度 広報委員会 2024年度 入試委員会 2024年度～ 学生・地域国際交流委員会				
学 外 活 動 業 績					
1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要10件程度)	2025年度～ 深川国際交流協会 監査				
2 学会・学術団体等の活動 (主要10件程度)	日本養液栽培研究会会員 北海道園芸研究談話会会員 北海道花き懇話会会員				